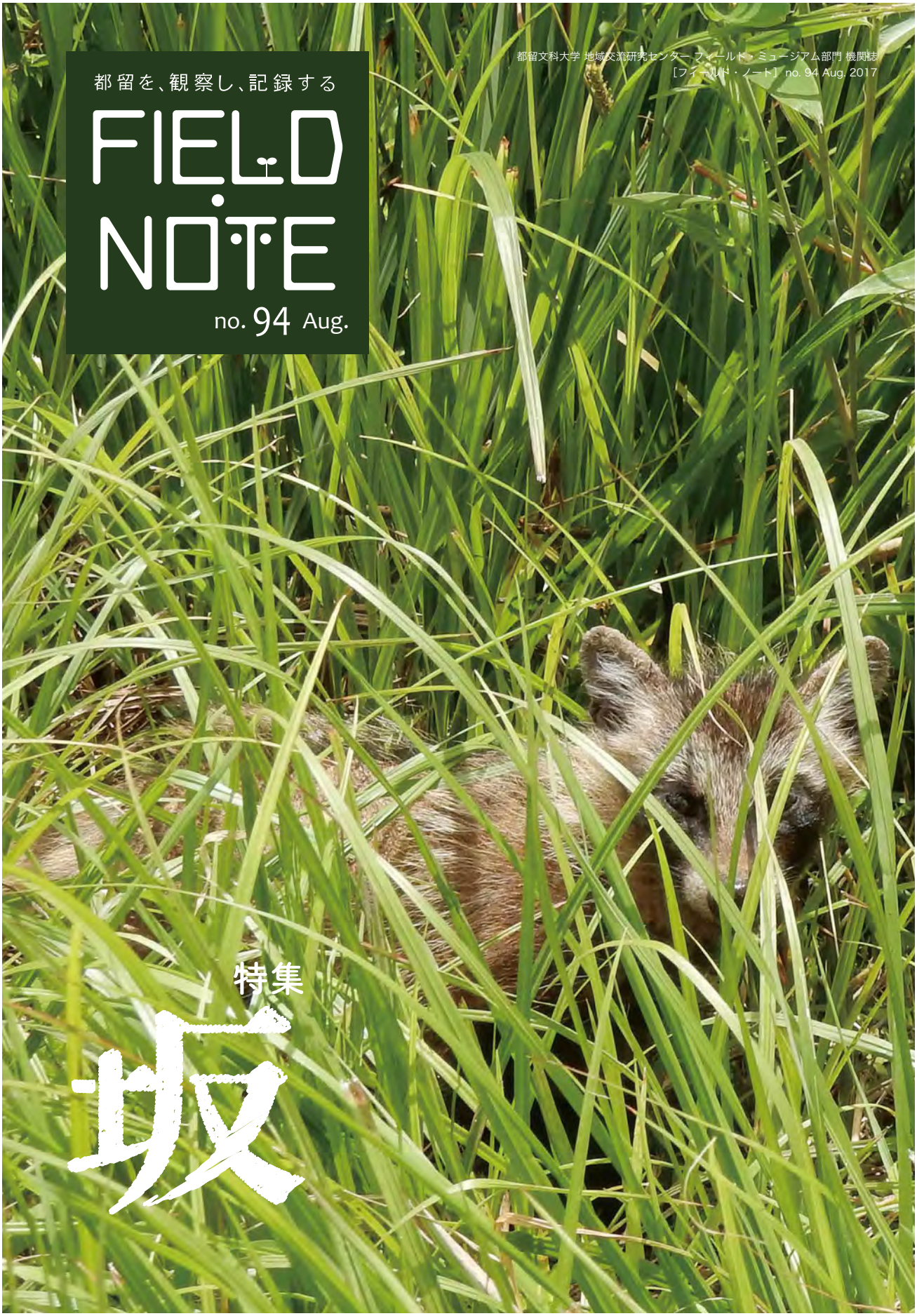
都留文科大学 地域交流研究センター フィールド・ミュージアム部門 機関誌
［フィールド・ノート］ no. 94 Aug. 2017

都留を、観察し、記録する

FIELD NOTE

no. 94 Aug.



特集

奴

FIELD·NOTE

no.94 Aug.

CONTENTS

特集 坂 — 6
あまんどう坂 — 7
鍛冶屋坂 — 8
団子坂 — 10
地蔵坂 — 12
元坂 — 13
赤坂 — 14

大切にされるお菓子 — 16
幸せのアルバム 後編―幸せを撮る人― — 18
わたしが元気の源 — 21
花屋さんの裏側 — 24
連載 こてんさんぽ 第1回 都留 — 27
ちょこっとうら山観察 — 28
うら山をのぞいてみると — 30
都留の月見いろいろ 前編 二十三夜講 — 32
てくてく都留さんぽ NO・2 小道をぬけて寺社めぐり — 34
連載 都留の山々を歩く 第5回石割山 — 36
笑顔をとどけに — 38
経験が語る — 40
好きをつらぬく — 42
フィールド暦 — 44

表紙の写真/草むらに隠れる子ダヌキ(中屋敷フィールド:2017年7月14日)

右/イソヒヨドリ　まだ幼いのか、羽がふわっとしています。鳴き終えると近くの岩にチョンと飛び乗って、そのあと飛んでいきました(本学1号館前:2017年7月20日)

Field・Map

柿と、まどう
01 あまんどう坂

鍛冶屋の歴史と歩む
02 鍛冶屋坂

信仰の名残があちこちに
03 団子坂

お地蔵さまに見守られて
04 地蔵坂

今日もニンジンあるかな
05 元坂

今号の
坂 & 山

踏みしめる 40 歩
06 赤坂

楽しい発見たくさん
07 尾崎山（うら山）

草原のなかに道
08 石割山

都留市 Data

面積	161.6㎢
総人口	30,945 人
（2017 年 7 月現在）	

広域 MAP

特集

坂

都留市は「坂」が多い土地です。富士山の裾野にあり、富士山に向かって上り坂になっています。また四方が山に囲まれているため、身近なところに坂があります。

坂はそこにあるのがあたりまえで、坂を目的に歩くことなんて今まで一度だってありません。

私たちはミュージアム都留の学芸員である森谷雅幸（もりやまさゆき）さんに、都留市にある名前のついた坂を教えていただきました。

今まで気にもとめていなかった坂に名前や歴史があることに気づくと、坂に興味がわいてきました。

今号では、ふだんから歩いていたけれど、見過ごしていた坂に注目してみます。

柿と、まどう
あまんどう坂

①あまんどう坂の途中。ここへ来るまでにじんわりと汗をかいた（2017年6月17日）
②坂の横には富士急行線が通っている。この日は電車を見られなかった（2017年7月14日）

▲「セルバ」の駐車場に落ちていた実。まだ青く、熟していない（2017年6月17日）

坂の名前の由来である「あまんどう」は柿の原木。あまんどうの木が近くに生えていたことから坂の名前になったそうだ。

6月17日、十日市場にあるあまんどう坂を歩いた。車がぶんぶんと横を通過していく。せまい歩道を一列になって進んだ。するとスーパーマーケット「セルバ」の駐車場のずっと奥に、あまんどうの木らしきものを見つけた。大きな木が1本、どーんと生えているのをイメージしていたけれど、隅のほうで他の木にまぎれて生えていた。実が地面にたくさん落ちている。大きさは葉っぱを含めて4、5センチほど。実だけだと1センチくらい。葉っぱの形が柿のものに似ている。これがきっとあまんどうだ。じっさいに見たことで、イメージだけだった大きさや手触りをじかに確かめることができた。

いったんここで坂を折り返した。行きとは反対側の歩道を歩く。坂道を下っていると民家にいろんな木が生えている。ぼんやりと眺めながら歩いていると、そのなかにさっき見たものと同じ実がなっている木があった。一か所に生えているだけではないのだと思って歩いていると、また同じ実をつけた木がある。「セルバ」の駐車場で見たものも入れると5本見つけた。あまりにもたくさん生えていたので、最初に発見したときの感動はどこかに飛んでいってしまった。

今度は近くに住んでいるかたにお話をうかがおうと、6月27日に坂へ足を運んだ。坂の近くにある永寿院（えいじゅいん）のかたと、永寿院にいらしていた地域のかたからお話をうかがった。あまんどう坂という名前があることは、あまり知られていないようだ。あまんどうについてうかがってみると、もう今はこのあたりにはないという。50年ほど前には坂周辺の至るところにあったそう。昔はたくさんありすぎて手をかけられなかった。そのまま熟すと実が落ちて、地面でつぶれてきたなくなってしまうので切ってしまったのだという。

私たちがあまんどうだと思っていたものは柿だったようだ。「あまんどう坂」より「柿の木坂」という感じだ。

結局、坂のまわりであまんどうは見られなかった。けれど近くにお住まいのかたの記憶には、今でもあまんどうは残りつづけている。

杉浦茜（国文学科2年）＝文・写真
関唯伽（社会学科1年）＝文・写真

鍛冶屋の歴史と歩む

鍛冶屋坂

①下から見ると坂がくねくねしているため、トンネルのほうまで見ることができない。昔はこの写真の右側に、鍛冶屋が多くいたそう

②左側にある青い道路を進むと鍛冶屋坂遊歩道がある。右側の二車線ある道路は鍛冶屋坂トンネルにつながる。トンネルにつながる道は車の交通量が多かった

③坂の下には道祖神と標柱が立っている。道祖神に五円玉と一円玉が供えてあった

現在はふつうの道路にしか見えない坂のまわりにその昔、鍛冶屋がたくさん住んでいたという。私たちは6月15日と23日にその坂を歩いた。また鍛冶屋坂の歴史については、長安寺の元住職である花園光明さんと金毘羅神社の金子寿元さんにお話をうかがった。

鍛冶屋坂の歴史を探ると、源頼朝の時代にまでさかのぼる。1193年5月、富士巻き狩りのさいに谷村の鍛冶屋七郎左右門が矢じりを数百本納めたという。その矢じりの切れ味がよいというところから、世にまれであるとし「稀代」の姓を源頼朝からもらった。稀代七郎左右門は鍛冶屋坂周辺の土地を持つようになり、鍛冶屋の集落として栄えるようになった。そこから鍛冶屋坂という名がついたそうだ。

鍛冶屋は戦の時代が終わると、農耕具のすきやくわ、馬のひづめのけがを防ぐ蹄鉄を作るようになった。太平洋戦争前ごろは、馬で道志・秋山方面から材木や木炭を、鍛冶屋坂を通って運んでいた。現在道祖神があるあたりには馬小屋が並んでいて、馬はそこで休憩していたそうだ。馬の売り買いもおこなわれていたという。花園さんは、「昭和20年代から30年代までは、（鍛冶屋坂を）馬が通っていた」とおっしゃる。当時の馬の役割はうしろにすきを付けて畑を耕すことや、荷物を運ぶことだった。鍛冶屋坂は現在アスファルトで舗装されているけれど、昔は赤土で、雨に削られ石が道一面に転がっていた。そのため鍛冶屋は、馬に蹄鉄を打っていたそう。

鍛冶屋坂遊歩道は、馬の糞尿が積み重なっていたため、鍛冶屋坂を利用する人たちから、「馬糞トンネル」と呼ばれていたという。鍛冶屋坂遊歩道だけでなく鍛冶屋坂にも丸い馬糞が転がっていたそうだ。

昔は人だけでなく馬も利用していた鍛冶屋坂。現在は車で通る人がほとんどだ。時代とともに地面も赤土からアスファルトへと変化している。けれど鍛冶屋坂がそこにあり、利用する人々がいるということは変わっていない。

私はふだん、何も感じずにこの坂を使っていた。だから、鍛冶屋坂の歴史がこんなに奥深いとは思ってもいなかった。次に歩くときは、鍛冶屋が多く、馬が行き来していた昔のことを想像しながら歩いてみよう。

平岡摩梨菜（社会学科2年）＝文・写真
宇佐美温加（社会学科1年）＝文・写真

④鍛冶屋坂トンネルの上にある看板⑤鍛冶屋坂トンネル手前に左へそれると、二人が並んで歩けるくらいの道がある。それを歩いていくと、1分もしないうちに右手に大室神社があらわれる。その神社のうらに二つの馬頭観音と他にもさまざまな石碑が並んでいた⑥鍛冶屋坂遊歩道の上にある看板⑦トンネル右横にある蹄鉄を打っている鍛冶屋の絵

【参考文献】
『都留の民話　後編』、都留市老人クラブ連合会代表 赤沢八郎、1972年
『都留市の今昔』、都留市老人クラブ連合会、1978年

※写真はすべて2017年6月15日

信仰の名残があちこちに

団子坂

①

②

①団子坂の終点は、道が二股にわかれている。正面に鳥居がどんと構えていた（2017年6月23日）
②団子坂にある石垣には、富士山から流れてきた溶岩石が使われている（2017年6月23日）

6月23日午前11時半ごろ、私たちは上夏狩（かみなつがり）の団子坂に着いた。住宅に囲まれたところにこの坂はある。そのためこの日は、団子坂沿いにお住まいの男性（83）のお話をきっかけに、坂の歴史に触れることができた。

名前の由来が二つ

富士山の溶岩で作られたこの坂は傾斜がきつい。まわりの民家の塀や庭にも溶岩らしき岩が多くある。本当にここまで溶岩が流れてきたのだなと実感しながら歩いた。

団子坂は1951年ごろまでは砂利道だった。その道の石が丸かったため、「だんご坂」と呼ばれ始めたのではないかと男性はおっしゃる。ミュージアム都留の森屋雅幸（もりやまさゆき）さんによると、この坂で話し合いが多くおこなわれたことで「談合（だんごう）坂」から「団子坂」と呼ばれるようになったという話も残っているそうだ。

舗装される前の坂の道幅は1.2メートルくらい。馬が通れるほどの幅だった。舗装された現在の坂の道幅は4メートルほどある。私たちが坂にいた1時間で車は11台、3人ほど歩いている人を見かけた。大きな道ではないが、今でも人通りはそこそこある。

富士山信仰と月待（つきまち）信仰

この坂では昔、富士講がおこなわれていたそうだ。富士講とは富士山を信仰する人々がおこなう講のこと。その名残だろうか、坂の始まりから歩いてすぐのカーブの開けた場所に、身禄堂（みろくどう）とフェンスに囲まれた道祖神があった。身禄堂とは富士講を復活させた導者、身禄が祀られているところだ。身禄は夫婦仲良くしようという教えを説いていた。そのためこの場所には、向かい合わせでくっついている双体道祖神がある。お互いを守り合っているような姿には、目が釘付けになる。このように抱き合っている双体道祖神は珍しく、市内には一つしかない。持って帰ってしまう人がいたため、40年ほど前にフェンスが取り付けられたそうだ。

坂を上りきったところには、高さ2.5メートルほどの木製の鳥居がある。そこをくぐった先にはお社（やしろ）と二十三夜塔があった。この石碑は、月の化身とされる勢至菩薩（せいしぼさつ）を信仰する行事、二十三夜講を記念して建てられた。市内で一番新しいため、この地域では最近まで信仰が続いていたのかもしれない。

坂の見た目を表すものと、そこでかつておこなわれていたことを表すもの。この二つのできごとから、坂の名前の由来が二つあることは十分に納得できる。一つの坂に由来が二つもあるなんておもしろい。もう一つ新しい坂を発見したような気持ちになった。団子坂は名前をきっかけに、歩く楽しみを教えてくれた。

山内利奈（社会学科3年）‖文・写真
佐藤琢磨（社会学科2年）‖文・写真

④

③

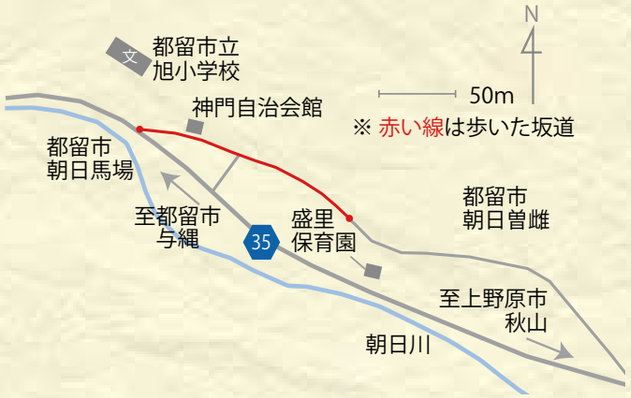
⑤

③双体道祖神。前にある飾りは、この地区のお祭りで使われたものだ（2017年6月23日）
④富士講にゆかりがある身禄堂（みろくどう）。いつ建てられたか定かではないが、かなり古く、一部壊れているところがあった（2017年6月23日）
⑤二十三夜塔。1938年に建てられた。高さは約130センチで、市内の二十三夜塔のなかでは大きいほうだ（2017年7月4日）

【参考文献】『都留の石造物』、都留市教育委員会、1983年

お地蔵さまに見守られて

地蔵坂



6月中旬。神門（じんがど）集落（※1）にある地蔵坂を歩いた。坂は旭小学校のわきの道から始まる。

坂を上る。傾斜はゆるく、上るのに苦労はしない。幅は車が約1台分と狭い。坂の両側には民家が立ち並ぶ。歩き進めて40メートルほどの地点で、馬頭観音を2体見つけた。うち1体はここ3年以内に置かれたものらしく、石像はピカピカしていた。馬頭観音があるところから先を見ると、坂の終わりが見えていた。坂を歩くこと約5分。坂の頂上にたどり着いた。坂の名前の由来になっているお地蔵さまが座っている。高さは約1メートル、幅は40センチほど。少し大きめな印象。顔立ちが優しく、なんだかほっこりした。

地蔵坂の近くにお住まいの小俣（おまた）勝（まさる）さん（80）・文子（ふみこ）さん（76）にお話をうかがうと、この道は甲州街道の裏街道（※2）として使われていた道で、かなりの歴史があるという。お地蔵さまも小俣さんが生まれる前からあったそうで、「この坂を見守る存在だよ」とおっしゃっていた。

地蔵坂は名前の通り、お地蔵さまが座っている坂であり、昔から変わらずに地域を見守る存在であり続けている。

小泉篤広（社会学科2年）＝文・写真

②

①

③

④

①坂の入り口（2017年6月17日）
②坂の入り口から40メートルほど進んだ地点で撮影（2017年7月20日）
③坂の途中にある2体の馬頭観音（2017年6月17日）
④左から馬頭観音、お地蔵さま、供養塔と3つの石像が坂の頂上に並ぶ（2017年6月17日）

※1　地蔵坂を中心とする集落。都留市朝日曽雌（そし）と朝日馬場のあいだにある
※2　甲州街道のわき道や抜け道となる道

今日もニンジンあるかな

元坂

①

②

①元坂の入り口。馬頭観音が8体祀られている②水道橋は雨風で色が変化し、コケも生えている。ここから道が3つに分かれる（すべて2017年6月22日）

毎日のように目にする坂が、山の反対にあるプログレスという会社の工場に繋がっているらしい。その話を聞いたとき、本当に繋がっているのか確かめたくなった。私たちは6月22日のお昼ごろ、元坂（もとさか）に向かった。

近所にお住まいの黒部さん夫婦によると、この坂は3、4年前に拡幅工事がされたそうだ。今は車一台通るのに十分な道幅だが、以前は人が一人通れるくらいの道だったらしい。入り口の馬頭観音にはまだ新しい花々と、ニンジンが一つ。近所にお住まいのある女性がお供えしている。その女性になぜニンジンなのかうかがうと、「馬の神様でしょ」とおっしゃった。なるほど。ニンジンはこの神様に一番ぴったりなお供えだ。

お供えのニンジン

上谷（かみや）が田んぼばかりだったころ、上谷に土地を持っている大野（おおの）側の人々が来るときにこの坂が使われていたらしい。現在は、周囲の民家に住む人々が通るほかに、都留興譲館（こうじょうかん）高校の生徒がトレーニングに使っている。

坂を上りはじめて3分ほど経つと、最初は民家だった周りの風景が草だらけになってきた。道も人が二人通れるくらいの道幅に狭まっていき、5分ほど歩くと完全に山道になった。右手に廃屋が見える。廃屋を過ぎるとすぐ、広場のようになった場所に出た。道が三つに分かれている。右手に見える道は、楽山公園へと続く道だ。道の入り口には2体の馬頭観音と、社（やしろ）が一つある。左手に見える道が鍛冶屋坂につながる道だ。中央に見えるのが水道橋で、その下に細い道が続いている。この細い道が目的の工場へと繋がる道だ。ここから道はますます狭まり、草をかき分けながら進んでいく。幅50センチほどの細い道を慎重に進んで行くと、やがて下り道になり、工場の敷地内に出た。工場内にいた女性にうかがうと、目的の工場であることがわかった。

元坂から続く山道は今は人がめったに通らないような古い道だ。けれど歩いてみると、かつて多くの人や馬が通っていたのだとわかる道だった。三つの道の分岐点やお社、たくさんの馬頭観音がそれを物語っている。今までは気にもとめていなかったけれど、これからこの坂を通りかかるたびに、ニンジンがあるか気になってしまうのだろう。

高橋光（比較文化学科2年）＝文・写真
窪田りさ（社会学科3年）＝文・写真

特集まとめ

坂

地域のかたから坂についてうかがうと、さまざまな記憶をたどることができました。

赤坂は、赤土で滑りやすかった。
あまんどう坂には昔、あまんどうが生えていた。
鍛冶屋坂ではたくさんの鍛冶屋が働いていた。
そんな記憶が坂の名前として残っています。

今では見ることのできない景色を、私たちはその記憶から想像できました。

どこまでも続く平らな道とは違い、坂には始まりと終わりがあります。道の途中に傾斜があることで、坂というアクセントができる。他の道とは違うから人々の記憶に残りやすいのかもしれません。

坂にまつわる人びとの記憶がたくさんあると知った今、坂を見かけると思わず立ち止まってしまうほど、坂を意識するようになりました。何気なく歩いていた坂も、親しみを感じながら歩くことができそうです。

踏みしめる４歩

赤坂

国道１３９号線を都留市方面に５分ほど歩き、ファミリーマートを裏手に曲がったところで菅野川（すげのがわ）沿いを進む。瀬中（せなか）赤坂自治会館に到着して驚いた。目の前に続く道は山道のようだったからだ。幅1メートルほどの細い道が草木のあいだにのびている。くわえて、見上げるほどの急斜面だ。滑らないようにと慎重に歩く。地面は固い土。40歩ほどと短い坂だ。上りきると馬頭観音が斜面に向かって20体ほど立っていた。

この山道が赤坂だと、深泉院（しんせんいん）の奥さんから教えていただいた。深泉院は遠方から来る登山者を迎える関所の役割を担っていたとのこと。赤坂は、赤土で大変滑りやすく危険だったため赤坂と名付けられたという。稲荷神社から深泉院に続く道のなかで一番の難所だったそうだ。1メートルほどの道幅は、馬車が行きかうほど広かったと聞いているそう。時代とともに、そばを流れる菅野川の水や雨風によって斜面が削られて、今のように細い道になったという。

赤坂は確かに坂と呼ぶことができる。けれど、ふだんの生活ではほとんど歩くことのない坂だ。山道と呼べるような道を坂としてとらえているのが私には新鮮だった。短い道をかみしめようと下り道は一歩一歩大切に歩いた。10歩ほど進んで足を滑らせた。油断大敵。深泉院に続く道のなかで今も変わらず一番の難所だった。

江利そらむ（社会学科２年）＝文・写真
佐藤成美（社会学科１年）＝文・写真

稲荷神社を横目に赤坂を上り始める（2017 年 6 月 19 日）

①坂の名前が由来となった赤坂駅（2017 年 8 月 4 日）

②坂の上に並ぶ馬頭観音。私たちが見たなかで一番古いのもが大正 13 年、新しいものが昭和 59 年に建てられている（2017 年 7 月 29 日）

大切にされるお菓子

コンビニやスーパーマーケットに行けばたくさんのお菓子が棚に並んでいる。気軽に好きなだけ買えるお菓子を食べるとき、いちいち気にとめることはない。けれど『リエール』で出会ったお菓子は、その一つひとつを大切にしたいと思えるものだった。

都留市つるにある、お花と雑貨のお店「リエール」（『フィールド・ノート』91号参照）にはときどき、手作りのお菓子が売られている。お菓子を作られているかたは磯文（いそふみ）さん（47）。5月21日に「リエール」でお話をうかがった。

「子どもに食べさせたい」の延長

磯さんは東京の大学を卒業後、栄養士の資格を取りたいと考え、短大に通ったそう。資格を取ったのち主婦になった。子どもが小さいころ、周りにアレルギー持ちの子が多かったという。アレルギー持ちの子どもでも食べられるものが作れたらと考えていた。また子どもたちに食べさせるんだったら、オーガニックや無農薬などの安心なものを食べさせたいという思いもあったそう。

「で、それから玄米とか雑穀みたいなのを主としたお料理教室があって、そこでアシスタントをしない？って言われて」。今から10年ほど前に東京都武蔵野市の料理教室でアシスタントをすることになったそう。「働くといっても月に4回とか6回とか。ほんとにお手伝いに行く感じで、アシスタントから講師になってしまい、そのころから多分『リエール』さんとも会ってこんなの作ってるんだけど、どう？って持っていったら喜んでくださって」。そうしてお菓子を卸しはじめて、今では10年くらいのつきあいだそうだ。「子どもに食べさせたい。その延長ですかね、今は」と磯さんはおっしゃる。

凝った装飾と小さな工夫

磯さんはおもに「リエール」と都留市中央の服屋さん、「JEANS SHOP NEW YORK」にお菓子を卸している。ほかにも要望があれば、個人のかたにも販売するそう。『リエール』さんだったらマフィンは小さめに作るし、『NEW YORK』さんだとおっきい感じのマフィンにして食べごたえがあるようにしてみたりとか、ちょっと変えたりして。それは自分が楽しんでやってます。メニューも決まってません。気分で」とおっしゃる。それぞれの客層を考えてマフィンの大きさを変えたり、具材や素材を意識したりする。個人に販売するさい、健康志向の人にはカフェインを含まない材料などを使うのだという。

磯さんの作るお菓子は食べる前から楽しめる。クッキーが一つひとつ袋におさまっていて、三つ連なっている（写真①）。クッキーは三つそれぞれ色が違いカラフルで、見た目もとてもかわいい。磯さんのクッキーを5年ほど前に買って、今でも食べないで飾ってる人がいるのだという。

「お願いされたら提供しますみたいなスタンスでしょうかね。あえて売ろうとかそういうのは苦手で……できません」とおっしゃる。とくに不特定多数の人への宣伝はされていないそう。お客さんそれぞれにあった、細やかな工夫や凝った装飾。それらはたくさんのお客さんを相手にしていてはできないことだろう。

「大事にいただく」

宣伝をとくにされていないけれど、「リピーターさんもファンのかたも多い」と「リエール」店主の三澤さんはおっしゃる。「リエール」にお菓子を置くと、だいたい当日には完売してしまうそう。三澤さんがクッキーに値段のタグをつけたあと、10分経ったころには店頭に並んだうちの半分がすでに売れていた。

磯さんのお菓子について、三澤さんは「見た目もすごくかわいくて、おしゃれでね。味も安心する。安定したおいしさ。食べて裏切らないので。たくさん食べるって感じではないし、ちっちゃいのを一つ食べるだけで満足感があるというか。大事にいただくみたいな」とおっしゃる。当日、私たちもクッキーをいただいた。素材の味がしっかり生きていて、さくさくとした食感が楽しくて、かみしめて食べる。山椒のクッキーはあとからすうっと程よい辛みが出てくる。もう一つ食べたいけれど、一つずつ大事にゆっくり食べたいとも思う。

＊＊＊

私は、磯さんの作るお菓子は浪費されないお菓子だなと思った。凝った装飾やお客さんに応じた小さな工夫は、大切にされる理由の一つだろう。けれどきっとそれ以上に大きな理由がある。それはお菓子に磯さんの雰囲気や生きかたのすべてがこもっていることだ。

磯さんは「目標とか計画とかそういうのはあんまりたてないで、生活を大事にしながら、ああこうしていくと自然かなと思える流れでやっていきたいと思っているので」とおっしゃる。磯さんは自然の流れに身をまかせて日々を過ごしているようだ。そうして満たされた生活のなかから生まれるお菓子は自然体で、素材のよさが生かされている。無理に背伸びをしようとしている感じがない。作ったお菓子が大切にされるのは、磯さんが満ち足りた暮らしをしているからなのだろう。

そんな満たされたお菓子を食べればそれだけで、なんでもない一日が特別な日になってしまう。

①侍とだるま柄の紙は、デザイナーをしている友人のかたがつくってくれたのだそう
②左から山椒、ローズマリーソルトのクッキー、いちご、抹茶とカシューナッツのスノーボール
③手のひらにちょうど乗るくらいのほうじ茶のマフィン。上に乗っているのは、ピスタチオとホワイトチョコ
④お菓子の装飾品をはんこで作っている磯さん（すべて2017年5月21日）

杉浦茜（国文学科2年）＝文・写真
平岡摩梨菜（社会学科2年）＝写真
関唯伽（社会学科1年）＝写真

幸せのアルバム

後編 ー幸せを撮る人ー

哲也さんの仕事道具。本体は変わっているが、レンズは哲也さんが独立したときに買ったものを大切に使っているそう。この写真は哲也さんが撮ってくださった

前号（93号）では「i-スタジオ」の伊藤哲也（てつや）さん（47）、利花（りか）さん（47）ご夫婦にお話をうかがった。お客さんの要望や、時代に合わせて写真を撮っているそうだ。お客さんに尽くす原動力は何だろうか。どうして都留で続けようと思っているのだろう。前号に引き続きお二人から語られた言葉を記したい。

幸せな瞬間を切り取る

写真館のおもな仕事は行事写真を撮ること。マタニティ、出産、お宮参り、入学式、卒業式、2分の1成人式（※1）、十三参り（※2）、成人式、ブライダルなどさまざまな行事を撮影している。学校の卒業アルバムや文化祭などの写真も撮っているそう。写真はだいたい哲也さんが撮影されていて、利花さんは「マネージャーのようなもの」とおっしゃっていた。それでも卒業アルバムの個人写真などは撮ることもあるという。

「七五三で来てくれた子が、（大人になって）赤ちゃんが生まれてお願いしますって来てくれたりってことがありますね。それが嬉しいですね」と利花さん。「孫みたいな感覚だよね」と哲也さんもおっしゃる。長いあいだ写真を撮り続けていることで、お客さんの変化や成長を感じることができるのだ。

「記念日とか大事な日には記録しに来てくださるかたがいるので、そういうかたは大事にしたいと思ってますね」と利花さんはいう。そして「自分で撮るのと違って値段はかかるけれど、それでも来てくれるのは価値を見出してくれているから。だからプロとしての仕事をしたい」とおっしゃった。

哲也さんが受賞したコンクールの賞状。左が「富士フィルム営業写真コンテスト」。右が「日本写真館賞」のもの。山梨県内で同時受賞したのは哲也さんだけだそう

お二人は自分たちの仕事を「人生の節目にかかわりを持てる、幸せな瞬間を撮影できる素敵な仕事」だとおっしゃっていた。価値を見出してくれるお客さんの存在が、お二人の原動力なのだろう。真剣でありながらも、笑みがこぼれるお二人の表情からそのことが読み取れた。

写真館の「残す」という役割

私が写真館で働くかたにお話をうかがいたいと思ったきっかけは、写真館が減っている今、どんな想いでお仕事をされているのか知りたかったからだ。

哲也さんは「写真館って仕事としてその地域になきゃいけないものだと思うんだよね」という。本来七五三や成人式などの行事は神社にお参りしたり、神様に報告したりするものだ。写真を撮ることがメインではない。そういったことを後世に伝えるのも、写真館の役割だと考えているそう。

また八朔（はっさく）祭りなど地域行事の記録も、行事を残すための一つだという。「記憶だけでもいいのかもしれないけど、実物が見られるものが残っていると、こんな感じだったんだって（行事のようすが）分かるからね」と哲也さんはいう。撮影すること自体が、行事を後世に残すことになるのだ。

写真を通して人生をともにする

お二人が写真館を残すべきだと考える理由はもう一つあった。「i-スタジオ」はおもに哲也さんが写真を撮っている。3代にわたって写真館を続けているので、先代、先々代から写真にまつわることはたくさん学んでこられたという。けれど、そのほかにも写真の先生がいらっしゃる。その先生は技術もさることながら、感性がとにかく素晴らしいかただそう。その先生によく、「写真館は（町に）必要で町の診療所と同じようなものだから代々つないでいってほしい」といわれるそう。「今は総合病院とか市立病院みたいなところってあるけど、昔は町医者ってあったじゃん。で、だいたいどこの人がどういう状況かっていうのは（病状など）分かるから、ある意味家庭の主治医じゃないけど」と哲也さん。利花さんも「成長を見届けるみたいな

※1 成人の2分の1である10歳（小学4年生）をむかえたことを祝う行事
※2 数え年で13歳になった男女を祝う行事。寺社にお参りするのが一般的

左：富士フィルム営業写真コンテスト 七五三写真の部 テーマ賞」を受賞した写真（19 ページの写真の左側の賞状）
右：哲也さんのおじいさんが使っていたカメラ。哲也さんが大学へ通っていたときはまだこのカメラは現役だったそう

感じでね」という。続けて哲也さんは、「前撮りに来てくれた子どもさんが、外で会ったときに『おじちゃん！』って声をかけてくれると嬉しいし、もうこんなに大きくなったのかって思うんだよね。そうやって成長を見届けさせてもらえるのが嬉しいね、人生をともにしてる感じ」と話してくださった。お仕事中だけでなく、外でお客さんと出会ったときにも成長を感じられるのだ。

人口が少なくてもお二人が都留で写真館を続けてこられている理由が分かった気がする。「ほんとね、なんで都留でやってるんだろうって思うよね」と哲也さんははじめ、笑いながらおっしゃっていた。でも「診療所じゃないけれど、やっぱりここに根ざしていかなければいけないなっていうのを、ね」とお二人は確認するように、目をときどき合わせながら話してくれた。

人が生きるうえで水ではなくお菓子のように必ずしも必要でないけれど、あったら心がほかほかするものが生活のなかにはある。私にとって写真館はその一つだ。そういったものがどんどん世のなかから姿を消していることが寂しかった。だからこの言葉を聞いて安心したし、都留でまだまだあたたかいものに囲まれて生活できる、と嬉しくなった。

＊　＊　＊

哲也さんと利花さんが撮った写真には幸せが詰まっている。それは満面の笑みの子どもや、この世でいちばんの宝物を見つめるような眼ざしのお父さん、お母さんなど、写真に写る人から感じ取れる。そして、その表情を引き出しているのはお二人だ。「iスタジオ」で撮られた写真を集めると、きっと幸せいっぱいのアルバムができるだろう。

お二人はこの仕事を引退するその日まで、きっと幸せのアルバムを作り続ける。写真を撮り続けることで、一つの壮大な作品ができあがるのだ。それも目の前の一人ひとりのお客さんを大切にしながら。

私も長い時間を掛けて何かを作りあげてみたい。日々の積み重ねの果てに、大作が生まれたらどれだけ幸せだろうかと、お二人のお話を聞きながら自分の将来に思いをはせた。

平岡摩梨菜（社会学科2年）＝文・写真

※写真はすべて 2017 年 7 月 10 日
「iスタジオ」所在地：都留市中央 1-4-24

わたしが元気の源

「1000 円カット」と聞いてどのような印象を持つだろう。私は儲けが少ないから、仕事が雑なのではと思っていた。でも渡邉美代子（わたなべみよこ）さん（66）がきりもりする「美容室おおらか」はそんなイメージにあてはまらない。ずっとかよいたくなる美容室だった。

「美容室おおらか」は都留市上谷の「おかじま都留食品館」のなかにある美容室だ。静岡県に本社のあるチェーン店で、1000円台でのサービスをおこなっている。

わたしは1000円カットと聞くと、少し身構えてしまうタイプだった。はじめて「おおらか」を訪れたときも、本当に大丈夫だろうか、と思いながら入店した。迎えてくれたのはお客さんとの楽しそうな会話と、渡邉さんのはつらつとした姿。カットをお願いするとハサミの運びがていねいだった。はじめに感じていた不安を忘れ、わたしも会話を楽しむ。なぜ1000円でこんなにていねいなのだろう、と思う自分がいた。後日、渡邉さんにお話をうかがった。

ふれあいの時間

渡邉さんは美容師の専門学校にかよったあと、美容室や飲食店の自営業をしていた。そのかたわら富士吉田の社会福祉協議会をとおして、一人暮らしのかたなどのカットをボランティアで8年ほどなさっていたという。1000円カットといい、ボランティアとい

い、いままで3000円ほどの美容室にかよっていたわたしは驚いてしまう。渡邉さんはどのような想いで髪を切り続けているのだろうか。

「やっぱり美容師の仕事っていうのは人と人とのふれあいがあるからね」と優しい表情でゆっくりおっしゃる渡邉さん。「みんな、人生が違うでしょ。こういう生きかたをされているかたもいるのかな、まだまだわたしの人生あまいな、なんて自分を見つめられる」。

渡邉さんが大事にするふれあいの時間に惹かれて常連となる人も多い。村尾雅美（むらおまさみ）さん（53）は息子さんの紹介でかよい始めて5年目だ。「渡邉さんはお客さんのこと、よく覚えているんですよ」と村尾さん。渡邉さんはお客さんを迎えるとき、名前はもちろん前回来てくれたときの話題も思いだすよう意識しているという。お客さんを迎え入れる渡邉さんの笑顔には会話を楽しみにする気持ちがあらわれているように見える。渡邉さんのやりがいは人と接することにあるのだろう。わたしが感じた居心地のよさの理由を見つけたようだった。

会話が弾んでいても、ていねいな渡邉さんのハサミさばき（2017年7月18日）

1000円のプロ意識

なぜ1000円なのか、1000円なのにこんなにていねいにしてくれる理由は何かをうかがってみた。すると渡邉さんは、「儲けは少ないですからね、社会貢献ですよね、本社の意向なんですよ」と正直に話してくださった。でも、渡邉さんのこだわりがお話の随所で感じられた。

渡邉さんは富士吉田市にお住まいで都留市まで車でかよっている。片道45分というその時間、渡邉さんはお客さんのことを考える。「オフからオンへの切り替えみたいな感じ」。はじめて訪れたときに感じた気さくさとはまた違い、プロの一面を見たように思った。「1000円だから、適当だろうっていう頭でくるじゃない。1000円であんなにていねいにしてくれるんだ、って言ってくれるように頑張ってる」。1000円なのにていねい、という言葉は渡邉さんのプロとしてのプライドのようだ。美容師は流行に敏感でいなければならないと、雑誌やテレビなどを見て勉強もしているのだという。お客さんを満足させたい、という気持ちが渡邉さんのこだわり一つひとつから感じる。価格は関係ない。

「美容師ってね、みんな気が強いのよ」と笑う渡邉さん。気さくなだけじゃない。秘められた負けん気も渡邉さんの魅力だ。

「おおらか」の外観。「おかじま食品館」の左側の入り口から入ってすぐ左手にある（2017年7月18日）

語る手

「美容室おおらか」の定年は65歳。定年を迎えたら、自営業をまた始めようか悩んでいたという。しかし、そのときを迎えると社長さんから現在の店舗を任せたいと言われた。「感謝してますよね。わたしには気力・体力が続く限りは定年がないんです」。渡邉さんが会社にも信頼されていることがわかる。

続けていきたいんですね、とうかがうと渡邉さんは気力・体力が続く限りという言葉を強調し、手荒れのことを話してくれた。髪の毛に色を付けるためのカラー剤は、皮膚に負担がかかるという。少しなら問題はないが、渡邉さんは40年以上美容師として手を使ってきた。手を見せていただけないか、とお願いすると「こんなカサカサになっちゃって。これ……、はさみだこなんですよ。爪はもう茶色い」と少し顔をしかめながらも見せてくれた。働いてきた人の手は、その事実を言葉よりも語るようで、わたしは「わあ」と声を漏らして触らせていただくと、皮膚はかたい。まるで渡邉さんの人生の積み重ねに触れているようで、ぶるっとした。渡邉さんのように言葉だけではなく、手も語るような人生を積み重ねたい。

渡邉さんの手。お客さんのために働かれたことがうかがえる（2017年6月14日）

渡邉さんとお客さん

「わたしは絶対目を見て話す。言いたいこともきちんと言う。お客さんをよいしょしないの」。渡邉さんはお客さんに対してうわべだけで接したくないという。髪を切るだけではなく、髪を切ることを通してお客さん一人ひとりときちんと接してきた、渡邉さんならではの答えのように思った。「悩んでる人にときどき喝をいれるの。はっきり、心で接する」。「おおらか」にかよう人にとって、渡邉さんは地元のかたならよき友人、学生ならお母さんのような存在のようになっているのではないだろうか。

渡邉さんは利益とは別に美容師という仕事にやりがいを感じているようだ。人とのふれあいが心から好き。お客さんに満足してほしい。「ここに来ると渡邉さんの元気のパワーをもらえるから、って言ってくださるのよ」と嬉しそうに笑う渡邉さん。好きな仕事をしているからこそ生き生きしている。それがお客さんにも伝わり、お客さんの元気の源になる。

わたしも、渡邉さんがいる「美容室おおらか」のお客さんでいたい。そして渡邉さんのように、誰かの元気の源になれる人でありたい。

佐藤成美（社会学科1年）＝文・写真
山内利奈（社会学科3年）＝写真

花屋さんの裏側

初めて「なら花園」に行ったとき居心地がよくて、ずっとそこにいたくなった。それはなぜなのだろう。そのわけを知りたくなって、再び「なら花園」に足を運んだ。

窪田りさ（社会学科3年）＝文・写真
山内利奈（社会学科3年）＝写真

店先。店内は10人くらい入ればいっぱいになってしまう（2017年8月1日）

6月27日、「なら花園」の店主である奈良亮さん（49）とその奥さんの容子さん（49）、アルバイトの小林春菜さん（38）からお話をうかがった。

都留市役所の正面からつづく道をまっすぐ進むと、車通りの多い国道139号線に出る。大月方面へ350メートルほど進んだ右側に、「なら花園」はある。もともとは亮さんのご両親が自転車屋さんをされていた。そこを花屋さんにしたそうで、建物は築40年くらい。花屋さんを始めてから、今年で30年になるという。

生産者のかた

亮さんに花屋さんを始めた理由を聞くと、「別に花が好きとかそういうんじゃないんだけど」と少し笑いながらいう。理由は「競りが面白いから」。てっきり花屋さんは花好きな人がやるものだと思っていたので驚いた。山梨県上野原市にある花屋さん「花光」のかたに誘われ、甲府市にある「山梨園芸市場」について行ったことがきっかけだ。

店の入り口にある手書きの看板（2017年8月1日）

左：店内の花たち。亮さんはいい花を長年の経験と感覚で仕入れている（2017年8月1日）

最初のうちは一つも買うことができなかったという。競りに参加しているほかの花屋さんは、新参者には買わせないようにするからだ。いつも亮さんの示した値段の少し上の金額で買われてしまったそう。まわりからいじわるをされているようで悔しかったが、そうではなかった。

ほかの花屋さんから、「素人は安く買おうとする。それじゃ生産者は生活できない。適正な値段で買ってやれ」という強いメッセージがあったのだ。亮さんは競りを始めたころ、安く買うことばかり考えていた。でも今では、生産者あってこその花屋さんだと考えている。

「この花いいなって買い続けるの。そうすると、生産者のほうから『この人はいつもうちの花を買ってくれるんだけど、どういう人だろう』って市場に問いあわせをして、山梨県都留市の『なら花園』さんですよって。青森の人だったんだけど、リンゴとか、そういうものを送ってくれて。（生産者のかたと）電話してあなたの花は素晴らしいよって。向こうもありがとうございますって。そういうことがあったの」。

亮さんは生産者のかたに会ったことはないそう。それなのに花屋さんはお客さんだけでなく、生産者のかたとも深く結びついていた。

とことん気遣う

亮さんが仕入れた花を箱から出して店先に並べ、ラッピングやアレンジして売るのは容子さんと春菜さんの仕事だ。春菜さんは仕入れた花が入ってくるときが好きだという。「（切り花が入っている）箱をあける

ケースのなかの花たち。温度は10℃くらいに保たれていて、夏ではほんの少し涼しいくらい。お客さんが持ち帰った後、温度差がありすぎるとすぐにだめになってしまうそう（2017年6月27日）

楽しみじゃないですけど」と無邪気に笑った。ラッピングやアレンジにはこだわりがある。容子さんと春菜さんは「それぞれのお客さんによって派手なのが好きだったり、シンプルなのが好きだったり。いろいろ聞き出しながら」つくっているそう。送り先の家にあうように、家が和風か洋風か気遣うこともある。

容子さんは「こちら側が（買ってくれて）ありがとうございますなんですけども、お金を払ってくれるお客さんのほうも『あ、こんなにきれいにつくってくれてありがとうございます』って笑顔で帰ってくれる。それがすごい一番うれしいから。つくってよかったなって思える瞬間なんですよ」といきいきとはずんだ声でいう。

お客さん一人ひとりをとことん気遣っているからこそ、お金を払うお客さんも容子さんと春菜さんに感謝する。その場面を見たことのない私でも、お二人とお客さんのやりとりをすぐ想像できた。容子さんと春菜さんが花のように、人を幸せにさせる雰囲気の持ち主だからだろう。

左：容子さんから一ついただいたベビーズティアーズ。玄関に植物を置くと外からくる悪い気を吸い取ってくれるそう。でも悪い気を吸い取らせるのはかわいそうかなと思い、日当たりのいい窓際に置くことにした（2017 年 6 月 27 日）
右上：カランコエという種類の花。カラフルでかわいらしい（2017 年 8 月 1 日）
右下：店のガラスの装飾。「心から『ありがとう』と送ること」と書いてある（2017 年 6 月 27 日）

亮さんと生産者のかた、容子さんとお客さんは、お互いに「ありがとうございます」と伝えあう関係だ。仕事だから感謝しなきゃ、感謝されるようなことをしなくちゃと思ってやっていたわけではない。一生懸命に仕事をしていた結果、お互いが感謝しあう関係になったのがうらやましい。

私は人のためになることしたとき、つい何かを期待してしまう。ここでお礼をいうのがマナーだと、意図して感謝をすることもある。そうではなく、心から感謝し感謝されるような人になりたい。そのために、まずは私自身が、気持ちの込もった感謝を伝えるところから始めようと思う。

「なら花園」所在地：都留市中央 3-4-3

連載

こてんさんぽ

第1回 都留

どうしても堅苦しいイメージを持たれがちな古典。もっと気軽に、もっと楽しく作品を味わってほしい。まずは私たちの住む「都留」を、古典のなかから探してみよう。

中里真琴（大学院文学研究科1年）＝文・写真

楽山公園から都留の町を見おろすと、自然に囲まれているようすがよくわかる

大学生活をともに過ごした友人たちが、3月に都留を離れていった。4年間馴染んだこの町を歩くと、すれ違う人のなかに彼らの顔を探してしまう。そんな癖が抜けないまま、早くも半年が過ぎようとしている。

私が大学院に進んだ理由は研究のためともうひとつ。まだこの都留の町に住んでいたいからだ。

都留に住む学生のなかには、もっと都会に住みたいと願うものもいる。学生だけでなく全国的にも、「都留」という字を見て「つる」と読めない人が多いだろう。じつは今から千年以上前には、都留はとても縁起のいい土地という認識があった。

君が世は都留の郡（こほり）にあへてきね
定めなき世の疑ひもなく

「都留という、長寿の象徴である鶴と同じ名前にあやかって、長生きしてください。はかない人生かもしれないけれど、次はいつ逢えるかなんて悪く考えないで」。

これは平安時代の歌人である伊勢（いせ）が詠んだもの。当時彼女の和歌は高く評価されており、天皇が和歌を選んでつくる勅撰集（ちょくせんしゅう）に多くの和歌が採られている。この和歌が収められている『後撰和歌集（ごせんわかしゅう）』もそのひとつ。地方官として甲斐国に行く人に向けて贈られたこの歌は、「都留」の地名を縁起物の「鶴」とかけて、遠い地へ向かう相手の不安を希望に変えている。残念ながら、その相手と伊勢との関係はわからない。

百人一首に採られる伊勢の和歌「難波潟（なにはがた）みじかき葦（あし）のふしの間もあはでこの世を過ぐしてよとや」は、恋人に会えない時間を苦しんで詠んだもの。もしも都留の和歌が恋人に宛てたものだったらどうだろう。「難波潟」の和歌で寂しがりな一面を見せながら、そんな気持ちを抑えて旅立つ相手を元気づける彼女が見えてくる。専門家の正しい解釈があるとしても、三十一文字の手紙から自由に想像することは、古典に親しむ第一歩だ。

「君が世は」の和歌を思いながら都留の町を歩いてみる。自分を取り囲むたくさんの自然に癒されて、穏やかな生活に繋がっていることをあらためて感じた。「長寿になれる土地」という考えかたに妙に納得し、そんな町に来られたことを嬉しく思う瞬間だった。

伊勢の時代、地方官の任期は4年。ちょうど地元を離れて勉学に励む学生の姿と重なる。この和歌のような言葉をもらって一人暮らしを始めた学生も多いだろう。私もあと1年半、縁起のいいこの土地で延長された任期を全うしよう。

【参考文献】片桐洋一、『新日本古典文学大系 6 後撰和歌集』、岩波書店、1990 年

ちょこっと うら山観察

センサーカメラ（※）を仕掛け、夜の動物を観察することを目的に本学のうら山へ足を運んだ。ところが昼のうら山には、今まで見落としていた魅力がたくさんあった。

1：リスの食痕（2017 年 6 月 9 日）
2：センサーカメラがとらえたコウモリの仲間。カメラ目線で写っている（2017 年 6 月 11 日）
3：葉っぱの上で動かないマルハナバチの仲間。近づいても動かなかった（2017 年 6 月 14 日）
4：ナナホシテントウを見つけ撮影。写真を撮ったあと、すぐに飛び去ってしまった（2017 年 6 月 9 日）
5：アナグマが掘った穴。穴の大きさは 20 センチほどである（2017 年 6 月 9 日）
6：センサーカメラに写っていたハクビシン。ふさふさとした毛並みが印象的（2017 年 6 月 27 日）

※センサーカメラ：動物の体の熱や動きを赤外線で感知してシャッターが切れるカメラのこと

夜に活動する動物を見たいと思ってセンサーカメラを仕掛けに行ったのは、6月14日のお昼すぎだ。空にはもくもくと膨らむ入道雲が浮かび、歩いていると汗があごまで伝ってくるくらい暑い日だった。昼間、本学のうら山を歩く機会はこれまでにも何度かあった。いつも「動物に会えるかな、会えたらいいな」と思いながらうら山を歩いたが、一度も出会えたことがない。今日はどうかな、とあたりを観察しながら歩いていると、多くのものが目にとまる。

新しい発見がたくさん

歩いていてまず気になったのは、半分に割れたクルミの殻だ。この日は約3か所で見つけた。豚の鼻のようにも見えるクルミの殻は、リスの食痕だという。私たちにはとてもできないと思うほど、きっちり半分に割れている。リスの器用さに感心した。

うら山を奥のほうへと歩いていくと、アナグマが掘った穴を見つけた。丸い穴の片側にのみ、土がこんもりと積もっている。穴を見たとき、私は真っ先に実家で飼っている犬を思い出した。我が家の犬が耳をパタパタと上下に揺らしながら、鼻に土がついてもおかまいなしで掘った穴にそっくりだ。アナグマも、わき目もふらず穴を掘り続けたのかな、と想像する。アナグマの息づかいが聞こえてくるようだった。

この日一番の発見は、葉っぱの上でじっとしているマルハナバチの仲間を見つけたことだ。ハチと聞くと、毒があって攻撃してきそうなイメージが私にはあり、近づきたいと思えない存在だった。でもこの日見つけたマルハナバチは、もふもふと毛をはやしたお尻をこちらにむけ、葉っぱの上から動かない。胴体もお尻も毛がはえていることを確認できるくらい、間近で見ることができた。葉っぱの上でひなたぼっこをしているうちに、うたた寝をしてしまったようにも見える。同行してくださった先生は「ハチのなかでもおとなしい性格なんだよ」と教えてくれた。納得の姿である。ハチは今まで私のなかで、近づいたら刺されそうで怖い存在だった。それが「より近くで見てみたい、触ってみたい」という印象に変わった。

うら山に登る機会がなければ、マルハナバチの仲間はおとなしい性格なのだということに気づけなかっただろう。この日見つけたハチの後ろ姿がずんぐりむっくりとしていて、思わずそっと撫でたくなるような容姿をしていることも。

虫って魅力的

私は今まで虫が大の苦手だった。手の小指の爪より小さい虫でも、見つけると悲鳴を上げてすぐに距離を置いていた。しかしうら山に何度か足を運ぶうちに、虫を見つけると「シャッターチャンス！」と思い、素早く近寄るようになった。これまでの自分からは考えられない大きな変化だ。

今回の目的は、夜に活動する動物をセンサーカメラを仕掛けて確かめることだった。しかし昼の山を歩くうちに、いつの間にか私は虫を見つけても逃げ出さなくなっていた。自分が苦手なものでも、知れば知るほど苦手意識は薄れていく。好きではないから知らないままでいいやと興味をなくしてしまうのではなく、一度向き合ってみることも大事なのだということを、マルハナバチが教えてくれた。

関唯伽（社会学科1年）＝文・写真

うら山を
のぞいてみると

私は今まで、めったに山に入ることがなかった。しかし、うら山に入ってみると、だんだん山に入ることが楽しいと感じるようになった。うら山は、たくさんの面白い発見であふれている。

うら山についてもっと知りたいと思い、どんな動物が暮らしているのかを調べることにした。6月9日、20日、7月10日に、本学うら山と、ムササビの森にセンサーカメラを仕掛けにいった。センサーカメラとは、生きものの熱や動きを感知して撮影するカメラである。どんな動物が写るのだろうか、とワクワクしながらうら山に登った。

後日、センサーカメラを回収して確認すると、シカ、イノシシ、アナグマ、コウモリ、ヤマドリ、タヌキが写っていた。こんなにたくさんの動物が写るとは思っておらず、「わー!」と驚きの声を上げてしまった。よく見ると、どの動物もフサフサな毛並みが分かってかわいい。うら山を歩くとき、この動物たちと同じ道を歩いていると思っただけでなんだか嬉しくなる。センサーカメラに動物が写ったのはすべて夜。私たちが寝静まった時間に動物たちは元気に活動しているのだ。

センサーカメラで動物が見られたことは、もちろん嬉しかった。しかし、私は山を登る途中で出会う生きものの痕跡などにどんどん興味が湧いていった。

生きものの痕跡を見つける

本学うら山もムササビの森も、人がふだん歩く道のすぐそばに入口がある。入ってすぐに、動物が植物を食べた痕を見つけた。こんなに近くで動物が暮らしていると知って驚いた。どんどん奥へ奥へと進むと、見つかる食べ痕の数も増えてくる。一番多く見つかったのは、リスがクルミを食べた痕だ。クルミは、まっぷたつにきれいに割れている。割れたクルミの痕は、ハートの形に見える。さらに、リスがモグモグとクルミを食べている姿を想像すると、かわいいの一言しか浮かんでこない。今まで、野生のリスに出会ったことは一度もない。はやく実物に会ってみたい。

動物の痕跡はまだまだある。歩いていると、ところどころに見つかるのは、地面にある謎のふくらみだ。土が掘り返してある。これはモグラ塚だ。モグラは、私の地元で一度見たことがあったが、塚を作ることは知らなかった。しかも、その塚はあまり大きくなく、私の靴くらいの大きさだ。モグラは小さい体で一生懸命地面を掘っているのか、と感心してしまう。

動物の痕跡を見つけるたびに、その生きものと同じ空間にいるのが嬉しくてたまらない。今は痕跡しか発見できていないが、生きものたちがどんなふうに暮らしているのか、この目で見てみたい。

生きものと出会う

うら山の出口のあたりで、ヤマカガシというヘビを発見。私の背丈くらいまで生い茂っている草のなかにいた。うら山に入って昆虫にはたくさん出会えたが、ヘビに会うのははじめてでとても驚いた。よく見ると体には赤色と黒色の斑紋が交互に入っている。存在感があって、少し怖かった。写真を撮っているときは驚くほどじっとしている。のぞきこむようにして見つめてしまった。

後から調べてみると、ヤマカガシは毒を持っていた。噛まれなくてよかったと思ったが、さらに調べるとおとなしい性格であることも分かった。危害を与えない限り、噛みつくことはないそう。

今まで興味のなかった生きものも、じっさいに見てみると面白くて惹きつけられる。じっくり観てみると、生きものに対する見かたが変わった。

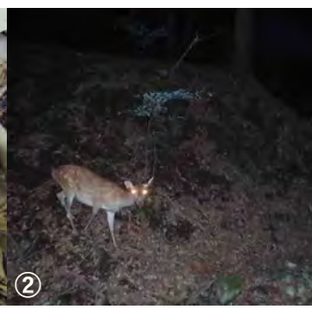
＊　＊　＊

うら山での観察を通して私は、山を歩くことがどんどん楽しくなっていった。動物の痕跡を探すなど、都留に来て初めて経験することばかりであった。

うら山に入って五感で感じたことすべてが新鮮な経験だ。今までは通り過ぎていたが、初めて出会う動物・昆虫・植物に興味を持ち、立ち止まるようになった。うら山をのぞけば、面白くて楽しい発見がたくさんある。

きっとうら山にはまだまだ多くの動植物が暮らしている。のぞけばのぞくほど活気にあふれた生きものたちに出会えるうら山は、私にとって柵のない動物園だ。

①


②

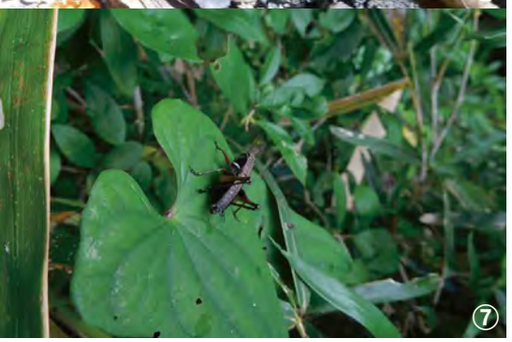
①ムササビの森にあったシカのフン（2017年7月10日）②センサーカメラに写っていたシカ。じっとこちらを見つめている（2017年7月4日）

③

④

⑤

⑥


⑦

③シカの足跡。地面にくっきりと残っていた（2017年6月20日）④ヤマカガシ。赤色の線がパッと目につく（2017年6月20日）⑤モグラ塚。誰かが土を積んだようにも見える（2017年6月9日）⑥リスが食べたクルミ。きれいに半分に割れている（2017年6月9日）⑦フンをしているコオロギ。生きものの暮らしを垣間見た瞬間だ（2017年6月20日）

宇佐美温加（社会学科1年）＝文・写真

都留の月見いろいろ

前編 二十三夜講

都留のまちを歩いていると「二十三夜」という文字が刻まれた石碑を見かけることがある。気になって調べてみたら、二十三夜講という月待（つきまち）信仰に関連した石碑だとわかった。地域のかたからは、そのほかに二十六夜講というものもあったと聞いた。今はない、都留の月待信仰とはどんなものだったのだろう。今回は二十三夜講を中心にお話をうかがった。

二十三夜講とは

「二十三夜」と書かれた石碑は二十三夜塔というものだ。都留市内には現在わかっているだけでも24基ほどある。これは月の化身とされる勢至菩薩（せいしぼさつ）を信仰する、二十三夜講をする人々が記念に建てたもの。この講は男性中心でおこなわれていたそうだ。私は二十三夜講という言葉を聞いたことがなかったため、この地域だけにある行事かと思っていた。ミュージアム都留の森屋雅幸（もりやまさゆき）さんにお話をうかがってみたところ、どうやら全国各地でおこなわれていたようだ。とはいってもその内容はさまざま。都留市内でも地域によって少し違っていた。

あなたのお家の月見は？

たとえば境（さかい）地区では年に4回おこなわれていて、大人はお酒を飲み、子どもは小豆粥を食べていたそうだ。また金井（かない）地区では、夜にうどんを作ってみんなで食べ、お酒を飲んでいたという話が残っている。ほかにも与縄（よなわ）地区では、月が出るのに合わせて、山頂まで登るという風習があったそう。桂町（かつらまち）地区にお住まいの山口とも子さん（69）によると、月の光だけを頼りに登山していた人がいたという。昔は山に出入りする人が多く登山道もしっかりあって、登りやすかったのではないかとのこと。今では考えられない光景を想像し、私も二十六夜山に登ってみたくなった。

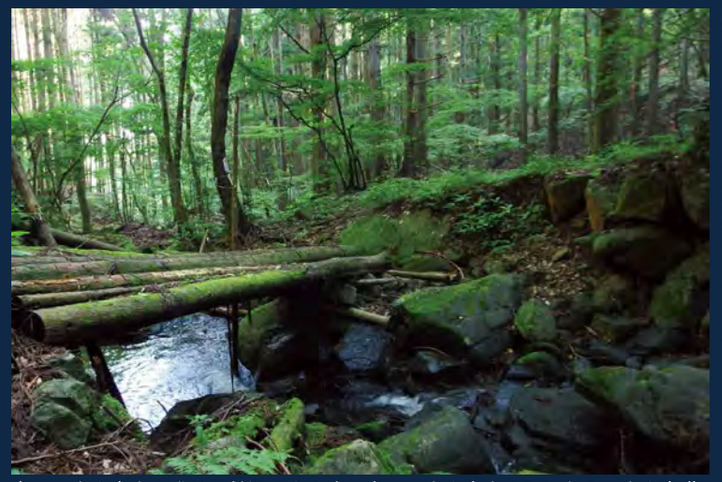
●●●

市内の二十三夜塔を見てみると、大きさやかたち、刻まれた文字はどれもそんなに変わらない。だからそばにあっても、これはいったいなんの石碑なのだろうと通り過ぎるだけだった。見かける石碑の数が多かったため、くわしく知りたくて今回調べてみることにした。そして講の内容が少しずつ違うことがわかり、ほかの習慣もあったのかもしれないと、思いをはせることができた。

後編では二十六夜山に登り、信仰がおこなわれていた名残について書きたい。

山内利奈（社会学科3年）＝文・写真

夏狩地区の団子坂にある二十三夜塔。昭和初期に建てられた。市内の建てられた年がわかるもののなかで一番新しい（2017年7月4日）



左：二十六夜山の登り口付近のようす　右：二十六夜山の頂にある二十六夜塔。石碑の前には金属の賽銭箱があり、たくさんのお賽銭が入っていた（2017年7月7日）

【参考文献】『都留の石造物』、都留市教育委員会、1983年

てくてく 都留さんぽ

No.2 小道をぬけて寺社めぐり

なにげない小道でも、のんびり歩けば
すてきな景色がみつかります。
あなたも都留を
てくてくお散歩してみませんか。

おさんぽした日
2017年7月5日

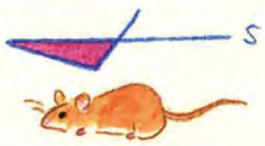
距離
片道約 1.06 km

時間
片道約 20分

散歩道
順路

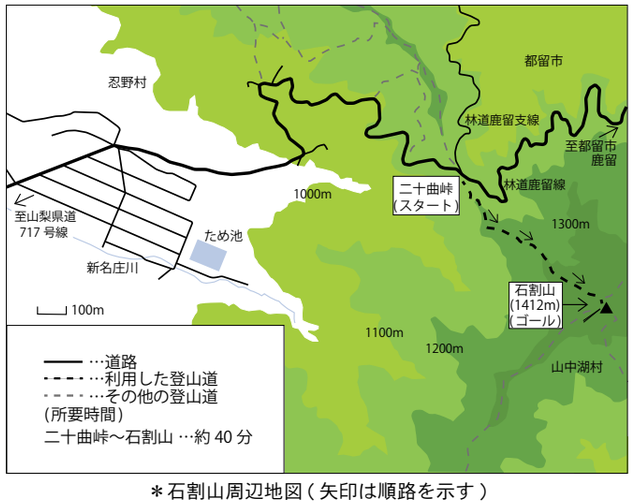
100 m

N S



塚原瑞穂(大学院文学研究科1年)絵・文

連載 都留の山々を歩く
第5回石割山



＊石割山周辺地図（矢印は順路を示す）

都留の山々に登って、山頂からの景色や登山道での発見を楽しみたい。第５回目は都留市・忍野村・山中湖村の境になっている石割山（いしわりやま）を目指す。初夏の山ではどんな発見が待っているのか。心をおどらせて山頂を目指した。

小泉篤広（社会学科２年）＝文・写真

二十曲峠から見える富士山

６月に入り、山の緑がより濃くなってきた。初夏の山に登りたいと思い、私は石割山を訪れた。石割山が位置しているのは都留市の南方で忍野村や山中湖村との境界にもなっている。

登り進めると

登山口である二十曲峠（にじゅうまがり）までは車で登る。車を降りると、あたりから「ジィー」と低い音が合唱のように聞こえてくる。声の正体は春から初夏に鳴くハルゼミだろう。私のなかでセミは夏本番というイメージ。６月にセミの声を聞くとは思ってもなく、驚いた。

登山口には「山の神」と書かれた鳥居と先に続く階段があって、そこを潜り、登っていく。その先から登山道が続いていた。登山口から３分ほどで、とつぜん頭上がひらける。というのもまわりの樹木の枝が切られていたからだ。その先には送電線の鉄塔が見える。高圧線に樹木の枝がかからないように切られたらしい。鉄塔の近くに立つと、富士山や鹿留山（ししどめ）が見えた。伐採された区間はすぐに終わり、植物が生い茂って、トンネルのようになったところを歩く。地面から１メートルほどの高さまでササが生えている。当たるとチクチクして痛いので葉をよけて歩く。

生い茂った区間は１００メートルほどで終わり、道に日が差し込んできた。登山道の傾斜はきつくなく、地面に石も少ないので歩きやすい。ハルゼミの声も相変わらず聞こえてくる。鳥の鳴く声も聞こえてくるが、その声にかき消され小さかった。ハルゼミの数の多さを実感する。

登山口から20分ほど歩くと、アヤメの花を数箇所で見つけた。５月から６月に咲く花であるため、そこからも初夏を目で味わえた。先ほどの植物のトンネルの区間とは違い、頭上に植物がないため日が照りつける。暑くて汗が噴き出してくるけれど、タオルで拭いながら頂上を目指す。

頂上から見える富士山。写真左中央は山中湖

オカトラノオと思われる草。まわりに広がる

ドウダンツツジ

アヤメ

登山道を歩いているときも、ふもとが見渡せる

再び鉄塔が見えてきた。そこまで進んでふもとを見下ろすと、今度は樹木が道の両側にあるため何も見えない。だが登山道は見てわかるため、自分がどれだけ登ってきたかがわかる。あたりにはササではなく、オカトラノオと思われる高さ30センチほどの植物が大量に生え、草原のようになっていた。１００メートルほど登ったことで、標高によって生える植物が変わっているのが見てとれる。登山口から約35分、先ほどの鉄塔から一つ先の鉄塔に着いた。そこが御正体山（みしょうたいやま）との分岐点にもなっている。分岐を右に曲がると、向かう先は小高い丘のように見えた。

真正面に見える富士山

小高い丘の先は石割山の頂上だった。ここまで約40分、地図で事前に確認して、登り上げる距離が短いことはわかっていたが、こんなに早く着いてしまうとは意外だった。頂上の真正面には富士山が見える。富士山のふもとは自衛隊の北富士演習場だ。左手には山中湖、右手には鹿留山がある。富士山は登山道の途中でも眺めたが、裾野まで見えるためか、途中で眺めたものより大きかった。真正面に富士山を見ながら、今まで登ってきた山よりも断然近い距離でコーヒーブレイクを楽しめることが贅沢である。

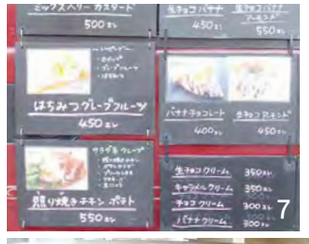
下山途中、体長30センチほどのホンドリスに出会うことができた。動物園で見た動きの遅いリスとは違い、野生では動きが軽やかで写真に収めることができないほど速い。その姿がいまでも思い出されるほど、私は強い感動を覚えた。

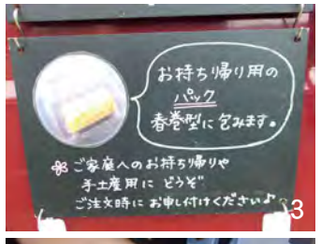
＊＊＊

今回は１時間もかからず、頂上にたどり着くことができた。登山道には歩くさいの障害となるものが少なく、歩きやすかった。それは登山道の整備が行き届いているからだろう。しかし登山道を歩いているときの発見はいつもと変わらないほどにあり、十分に登山を楽しんだ。とくにリスとの出会いは衝撃的で、今でも鮮明にその瞬間を思い出す。整備された道だったので、生きものにあまり出会えないだろうと、歩きながら思っていた。だが予想に反して、多くの動植物が発見できた。石割山は登山道の整備が行き届いているという、いつもとは違った特徴こそあるものの、変わらず多くの生きものとの出会いを私に与えてくれる山だった。

笑顔をとどけに

ワインレッドの車に乗って、都留までクレープを売りに来る「クレープモンターニャ」のお二人。いつもやわらかい笑顔で迎えてくださるお二人のことが気になってお話を聞いてみた。





1. 丹羽勝浩さん（右）と利柄さん（左）。お互いに顔を見合わせることが多いのが印象的だった　2. この日の日替わりのクレープはフルーツミックス　3. 持ち帰って家で食べる人用の巻きかたはだし巻き卵にそっくり　4. わずか 20 秒ほどで生地が焼き上がる　5. メニューは利柄さんの手書き　6. 渡す側も受け取る側も笑顔　7. 値段はだいたい 300 円から 500 円　8. 車の上の傘につるされているランプ。栃木県の友人が、引っ越しのときにくれたという。お店のブログにもよく写真を載せている（すべて 2017 年 7 月 5 日）

クレープ屋さんが来た

都留文科大学前駅から、スーパー「オギノ」の駐車場を横切って大学まで行く道の途中。そこへ、「クレープモンターニャ」が来る。ワインレッドのかわいらしい車でクレープの移動販売をされているのは、丹羽勝浩さん（49）と利柄さん（45）ご夫婦だ。おもに毎週水曜日と金曜日に、都留で手作りのクレープを販売している。「クレープモンターニャ」が都留に来るようになったのは昨年の10月。都留市に来たときに車を置いているのは、「ふじみハイツ」というアパートの前だ。ここの大家さんがこの場所を紹介してくれたのだという。都留になんだかおしゃれなクレープ屋さんが来始めたらしいぞと、昨年の秋は本学の学生たちが盛り上がっていた。私もそのうちの一人だ。女子大生の血が騒いで、授業の帰りに友だちと買いに行った。私がとくに好きなのは生チョコバナナだ。モチモチの生地と手作りの生チョコは、何度でも食べたくなる。今では毎週水曜日と金曜日が、私のなかでは「クレープの日」になっている。

思いがけない転機

お二人は2年前に栃木県から甲府市に引っ越した。それから勤めていた会社の経営が不安定になり、新しい仕事を始めようとしていた勝浩さん。そのとき、栃木県に住んでいたころの友人から、使っていないクレープの車があるからやってみないかと提案された。車は修理をすれば使える状態だった。勝浩さんの弟夫婦が以前クレープの移動販売をやっていたこともあって、クレープ屋さんをやってみようと思い始めたのだそう。

お二人は「クレープモンターニャ」を始めるまで、料理とはまったく関係のない仕事をしていたという。移動販売という仕事をすることに対して、不安はなかったのだろうか。

「友人から移動販売の提案をされて、お店をやるかどうかってしばらく迷っていたら、もう（車を）修理出しちゃったよってその友人から連絡が来て。じゃあもうやるしかないって」。勝浩さんは横に座る利柄さんと顔を見合わせて、当時を思い出すように笑いながら話した。その連絡が来てから二人でクレープの猛特訓をして、ようやく昨年の10月に始めることができた。「特訓中はほんとに、ずっとクレープばかり食べていましたね」と利柄さん。急な転職も、毎日のクレープの特訓も、かなり大変なことだと思う。けれど、お二人のお話を聞いてもいまいちその大変さが想像できない。きっとお二人があんまり楽しそうに話すからだろう。

笑顔につられる

利柄さんは、「お客さんがクレープを受け取るときに、みんな顔がにこぉってなるんです。今まで接客の仕事をしたときもそんなことはなかったから、それが一番嬉しいときです」とおっしゃった。二人のやわらかい雰囲気が、その笑顔や話しかたから伝わってくる。クレープを買う人たちはそれにつられて笑顔になってしまうのかもしれない。今回お二人のお話を聞きながら、きっと私も顔がにこぉっとなっていただろう。

※出店日は月によって変更になることがあります。詳しい日程はブログなどで更新される情報をご参照ください。
ブログ　http://montanya.blog.jp/
Twitter　https://twitter.com/crepemonte/

高橋光（比較文化学科2年）＝文・写真
平岡摩梨菜（社会学科2年）＝写真

経験が語る

「狩猟は男のロマンだ」。都留市古川渡にお住まいの山本良成さん（66）はそうおっしゃる。狩猟をはじめて今年で46年目。担当するおもな狩猟場所は、禾生地域と盛里地域だ。山本さんを紹介していただいた安田圭一さん（73）とともに、お話をうかがった。

江利そらむ（社会学科2年）＝文・写真
平岡摩梨菜（社会学科2年）＝写真

左に座るのが安田圭一さん（2017年6月15日）

鉄砲にあこがれて

山本さんは子どものころ、鉄砲をもつことにあこがれていた。当時、近所に住むおじいさんが使っていた空気銃に興味をもったという。使わせてもらえなかったので、杉鉄砲をつくって遊んでいたそうだ。

二十歳になると、さっそく銃の免許を取得した。文字で習うことよりも、じっさいに山に入ってからのほうが難しいことが多かったという。年配のかたたちに、動物の足跡の見分けかたや、山を歩くときの呼吸のしかたなどを教わったそうだ。何より、猟の対象となる動物の足跡を見分けることが大変だそう。山にはたくさんの動物がいる。どれが新しい足跡で、古い足跡か。夕方、家に帰ってからも自分で畑の苗を踏んで、見分けかたの復習をしたそうだ。そうして次の日の朝に、日陰と日向で足跡の乾き具合がどう変わるかを比べて覚えていったという。

猟をはじめてよかったことをうかがうと「健康にはいいと思う」とおっしゃった。山本さんは犬と同じ速さで歩くことができるという。動物の足跡を嗅ぎ分けるときの犬は、だいたい私たちの早歩きぐらいの速さだそう。急な斜面も、対象となる動物と同じ速さで歩いていかなければならないそうだ。自分のペースで歩く山登りとはわけが違うのだろう。

狩猟に関する資料をみせてくださった（2017年7月9日）

狩猟をしない安田さんは「鉄砲もちは鉄砲もつと（歩く速度が）速い。技があるんだよね。ふつうの俺たちにはついていけない」と、感心するようにおっしゃった。

気持ちの変化

山本さんがおこなう狩猟のひとつに巻き狩り猟がある。犬を放し、動物を寝床から追い出して猟をおこなう手法だ。狩猟チームは狩場を囲って待ち伏せをする。はじめ山本さんは、巻き狩り猟に参加するのが嫌だと思うときもあったそうだ。動物がめったに捕れなかったので、一人ひとりの責任が大きかった。半日かけて動物の足跡を探し分けて、追い込んで、撃っても当たらなかったら……。それが一番心配だったとおっしゃる。

今では、犬にGPSをつけてスマートフォン上で位置を確認できるようになった。タツマ（動物を待って狩猟をおこなう場所）までどのくらいか、もう少し下へ移動してなど、無線での連絡や指示を仲間へ具体的に出せるようになったそうだ。山本さんは「おもしろくないね。だれのところに行くか分かっちゃうから」とおっしゃる。確かにこれでは動物とのあいだにある緊迫した空気は感じられない。どこに動物が逃げているのかを想像する時間がなくなってしまうような気がした。

山本良成さん

都留市猟友会　幹事

動物への想い

山本さんは、狩猟中にイノシシに突進されて37針縫う怪我をしたことがある。同じようなことが今までに何回もあったそうだ。人間より先に犬のほうがやられてしまうことが多いともおっしゃった。想像しただけで怖くなってしまう。怖くないかと恐る恐る聞いてみると、すぐに「怖いとは思わないね。畜生。敵討ちだ。って」という。怖さよりも悔しさが勝るということに驚いた。対象となる動物を獲物として見るのではなく、同じ土俵で戦う相手としてとらえているようだ。

現在都留市の獣害の被害は多く、一年じゅう山に行かなければならないそうだ。仕事のような感覚ですかと尋ねると、「今はおかあと家にいると愚痴が出るから、山に出ている」と笑いながらおっしゃった。

6年前まで獣害の被害は今日ほど多くなかったという。山本さんは定められた狩猟期間に山に入っていた。期間となるのは11月15日から翌年2月15日の3か月間。期間に入る前の晩が来ると、山に入るのが楽しみでしかたなかったそうだ。本来、直前まで銃は保管しておかなければならないが、山本さんは前の晩になると、銃を枕元に置いて眠ったという。まるで遠足に行く前のようだ。山にいる時間、足跡を探している時間が本当に好きなのだろう。

＊＊＊

後日、銃を肩にかけて山を歩く山本さんの後ろを歩いた。こんがりと小麦色に焼けた肌から、日ごろからこの道を歩いていることが分かる。山に入ればいつどこに動物が潜んでいるのかわからない。そんな動物との駆け引きを山本さんは、「男のロマン」と表現する。怖さを感じ縮こまって歩く私には共感することができない。けれど長年の経験を経て堂々と目の前を歩いていく山本さんの後ろ姿はかっこいい。

※取材にさいしては、本文中でご紹介できなかったかたがたにも聞き取りさせていただきました。ご協力ありがとうございました。

【参考文献】
服部文祥、『狩猟サバイバル』、みすず書房、2009年
平野惣吉、『山人の賦Ⅰ』、白日社、1984年

好きをつらぬく

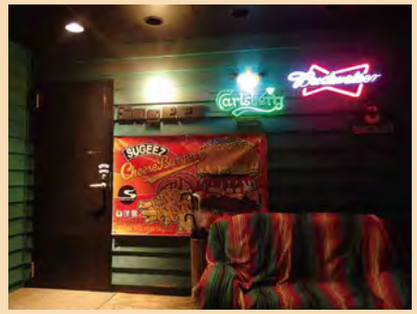
「こっち向いてください」と声をかけると、決めポーズで応えてくれた鈴木さん（2017年7月5日）

本学の近くに不定期で移動販売のハンバーガー屋さんがやってくる。お店の名前は「SUGEEZ（スージーズ）」。富士急行線の赤坂駅近くに本店があるらしい。6月21日、フードトラックを追って行きついた先は、いままで踏み込んだことのない世界だった。

赤坂交差点から国道139号線を下谷方面に50メートルほど進む。すると右手にネオンの明かりと黒い扉が見えてくる。少し大人の雰囲気がただよう。いままで自分が行ったことのない場所に、不安と期待で胸が高鳴った。

扉を開けて中へ入っていくと、店内にはブラックミュージック（※1）が流れていた。奥から「いらっしゃい」と声がかかる。パーマのロングヘアーを後ろでまとめ、口とあごのヒゲがもみあげまで伸びている男性が迎えてくれた。「SUGEEZ」のオーナー、鈴木健太（けんた）さん（33）だ。

鈴木さんと「SUGEEZ」

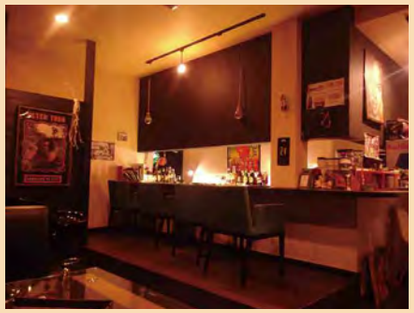


夜に通らなければお店だとは分からない。知る人ぞ知るという雰囲気だ（2017年6月21日）

「SUGEEZ」はハンバーガーをはじめとしてピザやお酒を出している。お店は18時30分から夜の1時まで営業している。内装で目を引くのは、DJ（※2）が曲を流すダンスフロアだ。ダンスフロアは飲食できるスペースとつながっていて、20人ほどが入れる。お店は音楽イベントやパーティーでも利用できる。

鈴木さんがこのお店を始められたのは、いまから7年前のことだ。26歳のときだった。高卒で働き始め、13個の仕事を転々としたあとに、このお店を構えられたそう。

「SUGEEZ」は開店当初、鈴木さんの好きなレゲエ（※3）が流れるジャマイカ料理を出すお店だった。「飲食を少しかじった素人がやってるような店だった」と鈴木さんはおっしゃる。お店を初めてからもアメリカやジャマイカへ何度も足を運んだそう。レシピを買ったり、料理の修行をしたりと現地の音楽や料理にふれた。お店はアメリカやメキシコの料理などを、さらに取り入れたものに変わっていった。「いまは自信を持ってお店をしている」と話してくださる。



お客さんは若い人だけでない。幅広い年齢層のかたがお店に訪れる（2017年6月21日）

鈴木さんがブラックミュージックに興味を持ち始めたのは、中学生のときだった。「友だちの姉ちゃんが持ってたCDを聞いたときに、衝撃を受けた」とおっしゃる。何度も同じ曲を聞いて、耳で覚えてレコードショップで歌いながら曲を探したそう。当時の鈴木さんの受けた衝撃が、いまの仕事にまでつながっている。「いまの仕事のほとんどが楽しい」と話す鈴木さんは輝いて見えた。「どうして都留で始められたんですか？」とたずねると、「ずっと都留に住んでるからね」とおっしゃる。「都留から出たのは最長でも2ヶ月ぐらいかな」と話す。

世代から世代へ

むかしは都留にもDJができるクラブハウスのようなお店があったという。鈴木さんが高校生のころ、DJの練習をするためそこにかよっていたそうだ。いまの「SUGEEZ」にも同じように高校生のときからかよっているDJのグループがいる。20代前半を中心に7〜8人で活動する「Tuff（タフ） Step Sound（ステップサウンド）」というチームだ。メンバーは特別に声をかけたわけではなく、自然に集まったのだそう。DJに興味があったのは2人だけだったが、その2人の友人たちがどんどんDJを好きになったそう。

自分の好きなことに共感したり、興味が合ったりする人は少ないけれど、同じブラックミュージックという文化に共感してくれるのは嬉しいと鈴木さんは話してくださる。

鈴木さんがDJをできる場があったように、もう一つ次の世代の集まれる場として「SUGEEZ」がある。世代を超えて、同じ「好き」を持つ人がつながれる場所なのだ。

＊　＊　＊

「やりたいことをやってたら、それが仕事になった」と鈴木さんはおっしゃる。中学校のころの友人に会ったら「10代からやってること変わってない」と言われたそう。ブラックミュージックは万人受けするものではないかもしれない。それでも鈴木さんは自分の受けた衝撃をずっと離さずつかんでいたのだと思う。

お話をうかがって、私が中学生のころ、ヒキガエルのどっしりとした体を見て「なんてかっこいいんだ」と衝撃を受けたことを思い出した。誰かが共感してくれるわけではなかったけれど、私はヒキガエルに魅力を感じた。他人がどう思うかではなく、自分の向かいたい方向へ進んでいく。そうすれば鈴木さんのような、自分の「好き」をつらぬいて輝く大人に、きっとなれる。

佐藤琢磨（社会学科2年）＝文・写真

※1．ジャズ・ブルース・ソウルなどアメリカの黒人音楽の総称
※2．ディスコやクラブなどで、ダンスミュージックを選曲してかける人
※3．ジャマイカで1960年代に生まれた大衆音楽

フィールド暦

太陽の光がジリジリと照りつけ始め、汗がにじむ季節になりました。夏の訪れとともに、生きものたちはますます元気な姿を見せてくれるような気がします。今回は、6月から7月に出会えた生きものたちを紹介します。

本学フィールド・ミュージアム＝文・写真

コミスジ

（6月8日　本学美術棟裏）

美術棟の裏で、翅を広げて葉に止まっていました。キャンパス周辺でよく見かけます。黒い翅に光が当たると、緑色や青色に輝きます

コゲラ

（6月8日　楽山公園）

桜の木に止まったコゲラが、キアシドクガをつついていました。頭に赤い羽が見られないため、メスだと思われます

キアシドクガ

（6月14日　本学うら山）

ミズキの周りにたくさん飛んでいました。幼虫はミズキの葉を食べます。都留市では、5年ほど前から大量に発生するようになりました

ミツバウツギ

（6月14日　本学うら山）

春に白い花を咲かせ、6月にはハートのような形の果実をつけます。果実が乾燥して割れると、光沢のある種子が現れます

クジャクチョウ

（6月20日　本学うら山）

平地や山地の草原を飛び、成虫で冬を越します。クジャクのように鮮やかな翅を、すりあわせて音を出すといわれています

ナナフシ

（6月20日　本学うら山）

木の枝になりきっているのでしょうか。動きはとてもゆっくりでした。触覚が短く、羽がないのが特徴です

シュレーゲルアオガエル

（7月4日　本学うら山）

動く気配もなく、じっと葉の上に止まっていました。鮮やかな緑色をしています。鳴き声は高めで、コロコロッと鳴きます

ハナイカダ

（6月14日　本学うら山）

花と果実が葉の上につくのが最大の特徴です。その様子から花が筏に乗っているようだ、という意味で名付けられたそうです

バイカモ

（6月17日　長慶寺）

きれいな水場にしか繁殖しません。梅のような形の小さな花が、水面いっぱいに揺れていました。花は秋まで見ることができます

ヒルガオ

（6月20日　本学うら山）

アサガオに似た花を、昼間に咲かせます。太陽に向かって上向きに花が咲いていました。夕方にはしぼんでしまいます

アカボシゴマダラ

（7月12日　本学4号館前）

葉に紛れていて気がつきませんでした。成虫になると白と黒の柄のチョウになります。都留市では5年ほど前にはじめて確認されました

アブラコウモリ

（7月12日　本学1号館前）

大学の校舎に迷い込んでいました。体長は5センチほどの小型のコウモリです。短く密な毛が印象的でした。寿命は約3年です

ツマグロヒョウモン

（7月16日　本学4号館前）

じっと花の蜜を吸っていました。模様がヒョウ柄のようで、目を引きます。前の翅の先が黒いのでメスです

ホタルブクロ

（7月4日　本学うら山）

長さ4～5センチの大きなつりがね型の花が下向きに咲いていました。白や濃い紅紫のホタルブクロもあります

ネジバナ

（7月7日　本学4号館前）

芝生によく生え、花は茎の周りに螺旋状につきます。ねじれは左巻きも右巻きもあるそう。ラン科の植物で、きれいなピンク色でした

ヤマユリ

（7月20日　都留市戸沢）

山道の途中で見つけました。花の直径は20センチほどあり、大きいです。花の匂いを嗅ぐと甘い香りがしました

（撮影日：2017 年 7 月 4 日）

次回予告

看板(仮)

発行予定 2017 年 冬

写真の看板は十日市場にあるゴミステーションの後ろに掛けられていました。

FIELD·NOTE

no. 94 Aug.

発行人
北垣憲仁〔48〕
統括編集者
西教生
編集長
長尾泉
南條新〔1,2-3〕
副編集長
山内利奈〔10-11,32-33〕
編集
塚原瑞穂〔34-35〕
中里真琴〔27〕
小俣渓和〔4-5〕
窪田りさ〔13,24-26〕
江利そらむ〔14,40-41,46-47〕
小泉篤広〔12,36-37,48〕
佐藤琢磨〔6,10-11,42-43〕
杉浦茜〔2-3,7,16-17〕
高橋光〔13,38-39〕
平岡摩梨菜〔8-9,15,18-20〕
宇佐美温加〔8-9,30-31,44-45〕
佐藤成美〔14,21-23,44-45〕
関唯伽〔1,7,28-29〕
編集補助
今村遥香
高橋未瑠来
ロゴデザイン
工藤真純
〔 〕は編集担当ページ

FIELD·NOTE (フィールド・ノート) 94 号
発行日：2017 年 8 月 26 日
発行部数：700 部
発行・編集：
〒402-8555
山梨県都留市田原 3-8-1
都留文科大学
地域交流研究センター
フィールド・ミュージアム部門
『フィールド・ノート』編集部
E-mail：field-1@tsuru.ac.jp

バックナンバーは都留文科大学地域交流研究センターにありますので気軽にいらしてください。

編集後記

記憶をさかのぼる

つわものがいる！と思ったのは、3 歳のころでした。私は当時わたがし（・・・）という食べ物を知らず、白くてふわふわしたものは布団のわた（・・）だと思っていました。だから母と祖母がわたがしを嬉しそうに食べている姿を見て、子どもながらに引いたことを覚えています。小学校低学年のときもお祭りの出店で売られているわたがしをねだっている同い年くらいの子を見て、かわいいキャラクターの袋にだまされているよ、中身は布団のわただよ、って思っていました。わたがしとの出会いがこんな感じだったので、いまだに苦手です。　（平岡摩梨菜）

ぼくが山を好きになったのは高校生のときです。最初の山行は秩父山系の雁坂峠（かりさか）でした。登り始めたはいいものの隊列のペースについていけず、何度も山を下りたくなりました。追い打ちをかけるかのように頭痛と山の寒さが襲います。気分は最悪です。隊列のペースにやっとの思いでついていき、目的の雁坂峠に着きました。そこからの景色を見たとき、山のとりこになりました。どこまでも続く山々。頑張って登った甲斐があった、諦めなくてよかった、そう思いました。大学生になってから山に行く頻度は減ってしまいましたが、これからも絶景を求めて山に通いたいです。　（小泉篤広）

みなもとの頼朝は現代風のイケメンに、フランシスコ・ザビエルはツインテールに。私の教科書のなかでは、偉人たちは元の面影がまったくありません。私は小さい頃から、ペンを持つとすぐに落書きをするのが癖でした。絵を描くのが好きになったのは、そのせいかもと思っています。授業中、先生に注意されたこともありますが、大学に入ってからは絵を描く機会が多くなりました。怒られるような癖でも少しは役にたっているんだぞと、心のなかであの先生に言いたいです。
（高橋光）

©2017『フィールド・ノート』編集部　乱丁・落丁の場合はお取り替え致します。編集部までお知らせください。

FIELD·NOTE no. 94
発行日 2017年8月26日（年4回発行）
発行所 〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1 都留文科大学
地域交流研究センター フィールド・ミュージアム部門『フィールド・ノート』編集部

本学４号館前にあるビオトープ（2017 年 7 月 21 日）

人を惹きつける自然のちから

都留文科大学地域交流研究センターフィールド・ミュージアム部門では、キャンパスを「自然に親しむ入り口」と考えています。そこで、『フィールド・ノート』編集室の前では山梨県産のメダカや、ヒャクニチソウなどのチョウが訪れる花を育てています。

休み時間になると学生や教職員が生きものを観察するようになりました。「毎日、メダカの成長を見るのが楽しみです」という人もいます。

自然には人を惹きつけるちからがあります。都留フィールド・ミュージアムでは、そんな生きいきとした自然の観察を楽しみ、学びあうことも大切なテーマにしています。

オオムラサキのメス（2017 年 7 月 20 日）

ヒャクニチソウに止まるアゲハ（2017 年 7 月 22 日）

フィールド・ミュージアム

「都留フィールド・ミュージアム」とは？：私たちのフィールドは、特定の地域に固定はしませんが、とくに都留市を拠点として富士山とその山麓、桂川（相模川）流域に注目して活動しています。

名称について：大学だけの取り組みではなく、広く市民と共有し、地域に開かれた交流を育みたいという思いから、「都留フィールド・ミュージアム」という表記を用いています。本学の地域交流研究センターが、この活動を担っています。